

| | |
|--|-------------------------------|
| 国際社会の動向と日本の果たすべき役割 ～主体的に思考する芽を育成する～ | 横浜市立みなと総合高等学校 教諭 智野豊彦 |
| 担当教科：地歴・公民科 対象学年：3年次生、 | 実施科目：教養現代社会（選択科目） 対象人数：14名 |
| 時間数：6時間 | |

指導案

実践の目的

グローバル化が進展する国際社会において、経済の相互依存関係の深まりや南北問題などについて理解させ、国際協力や国際協調について主体的に考察する力の基礎を養う。

授業の構成

| 実施日 | テーマ・ねらい | 方法・内容 | 使用教材 |
|------|--|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 6/10 | 「国際貢献」などについて、自分の問題としてとらえるきっかけをつくる。 | JICAエッセイコンテストに参加し、同年代のすぐれた作品を参考にする。 | ・2009 優秀作品集 |
| 6/21 | 「必要不可欠」と「あればいいもの」を比較し、国際理解の芽を育てる。 | 無人島ゲーム（開発教育） | |
| 8/30 | カンボジアを身近にとらえさせる。自分たちの思い込みや、誤解について気づく。 | カンボジアで活動している方々への生徒からの質問と回答を提示する。 | ・質問集約用紙 ・回答 |
| 9/13 | 貢献や協力などを、遠い異国の問題としてとらえるだけでなく、身近なところに目をむけさせる。 国際理解について、主体的に思考し、JICAエッセイコンテスト作成の参考とする | フォトランゲージ（1）（開発教育） | JICA教師海外研修（カンボジア）での写真や、みなと総合高校などの写真 |
| 9/27 | 貢献や協力などを、遠い異国の問題としてとらえるだけでなく、身近なところに目をむけさせる。 国際理解について、主体的に思考する | フォトランゲージ（2） | 教師海外研修（カンボジア）での写真や、みなと総合高校などの写真 |
| 9/30 | 時事問題を題材に、異なる立場について理解し、見識を深める。 | ニューヨークにおけるモスク建設に対する賛否 | 新聞切り抜き |

横浜市立みなと総合高等学校における国際理解教育について

本校では、多文化共生・異文化理解教育などの取り組み実践を重視した国際理解教育を学校の特色の一つとしている。国際理解教育は「グローバルシティズンの育成」をその大きな目的としている。その手段として、「外国語」や「交流」のプログラムは他校に比しても充実したものとなっている。今年度も例を挙げれば、「外国語」においては「英語」以外にも、「中国語」「イタリア語」「フランス語」「ドイツ語」の選択科目の講座が設置されている。また、福島県の「プリティッシュ=ヒルズ」における語学研修にも参加した。

「交流」においては、海外留学の支援や海外留学生の受け入れを積極的に行いながら、カナダの姉妹校「ブリタニア=セカンダリ=スクール」への訪問を含む交流、夏期休業中における上海訪問などにも力を入れて取り組んでいる。また、自発的な「国際交流パーティー」と呼ばれる組織などに

よって、留学生の学校生活の援助や、「APEC 21の大きな絵本」をはじめとした国際交流イベントに参加する機会をつくっている。

上記のような活動によって、外国語を使って諸外国の人と交流してグローバルな世界や諸外国と関わり、国際的な大きな舞台での活躍できる魅力を生徒に提示してきている。しかし、本校においては、このような自発的な活動に積極的に参加できない生徒も多数存在する。さらに、足下からの国際理解、身近な暮らしと世界という視点や、「誰もが安心して暮らせる」共存共生の意識を育み偏見などを払拭させていく役割を、学校において生徒が一番多くの時間を費やす通常の一斉授業での役割に期待されることは多い。この一つとして、地歴公民科での授業として取り組む。

授業詳細

1, JICAエッセイコンテスト参加について

国際理解教育は、グローバルな視点に立脚しながら、日常において主体的に自らの意志や発想で、能動的に身近なことから行動を起こせる人間の育成も目的である。「Think globally, Act locally」という標語がそれをよく表している。その一方、学習者である生徒は地歴公民科全体を、暗記中心の科目と捉え暗記事項を要領よく教師側が提示することを求める傾向がある。主体的に考える能力・態度の育成や、グローバルシティズンとしての資質養成に、ある一定量の知識は必要であり、体系だった学問の習得はその要請効果をより高める。その一方で、獲得した知識を主体的に身近なことから結びつけていない生徒も多数いる。以上の2点の課題に対して、今年度のJICAエッセイコンテストのテーマ「行動～地球の仲間のために、私たちができること」は有効な素材と判断した。今年度は、3年次「教養現代社会」では必修課題、2年次「日本史B」では自由課題として取り組ませた。また、他の地歴公民科教員にも呼びかけ、希望者の参加を募った。

今回の課題を生徒に提示したのは、体系的知識習得を効果的にすることも視野にいたったものである。体系的な知識習得に対して、高校での伝統的授業では講義型で知識をインプットさせることを重視してきた。先に述べたように、社会についての主体的考察・理解や生き方についての自覚の育成や公民としての資質養成には、ある一定量の知識は必要で、また、体系だった学問の習得はその要請効果をより高めるものである。しかし、学習者にとってインプットのみ作業は、学習者の理解の不十分さを気づかせない限界をもつ。生徒が授業を聞いているときはわかったつもりになっても、テストなどで問われるとわからないなどの問題には、筆者だけでなく多くの教員が悩んでいることである。それに対して学習者のアウトプットは理解の不十分さをごまかすことが出来ず、自らの修得した知識を精一杯使って自己の限界と可能性を認識し、さらにその限界と可能性の認識が、それを埋めたり伸ばしたりするインプット項目を得た際には、そのインプットを効果的にするものである。自発的取り組みではなく、強制的にでも課題に取り組ませることから、課題提示後の講義授業でのインプットの効果を期待するものでもある。

2, 無人島ゲームの実施について

8月に実施予定の教師海外研修からの帰国後に、カンボジアを中心としたフォトランゲージを行う計画をたてたが、実践の前に課題があった。それは、対象クラスである教養現代社会が選択科目であり、授業以外で生徒相互のコミュニケーションがとりづらいことである。さらに、本校では、クラス全体で行動することも少なく、指定されたグループで行動したり、人前で発表したりすることが苦手の生徒も多数いる。フォトランゲージでは、グループを組ませ発表させるが、その前の指導として、早い時期に開発教育の手法の一つである「無人島ゲーム」を実施した。

今回の実践においては、グループ分けには数回にわたって「部屋の四隅」を利用した。これを何回も繰り返すことで、普段話さない生徒同士のグループを作成した。また、「部屋の四隅」のグループ分けの条件によって、自分が多数のグループになったり少数になったり、場合によって孤立した

りする体験から、社会におけるマイノリティー問題への人権的素養を培えた。

「国際化とは、異なる価値観の人と協働し成果をあげること」という面もある。この意義を重視して、「部屋の4隅」で不作為に成立した3～4人のグループで「無人島ゲーム」を行わせた。今回は、成立した仲間と無人島に暮らすために必要なものを考え出し、9個に選んだものを黒板にダイヤモンド型にランキングさせた。積極的に発言する生徒も、沈黙が多い生徒もいたが、全体的には熱心に活動していた。話し合いの始めにおいては、レジャー用品やレクレーションのための品物が数多く挙げられていたが、話し合いが進むにつれ生きていくために何が必要であるかという観点からも考えるようになってきた。このため、当初予定していたよりも話し合いの時間を延長した。また、ランキングの発表では、誰がどのように話すかなどの役割分担に手間取ったり、ランキングの理由説明も上手く説明できなかつたりして、グループごとの比較や全体をみでの意見などを求める時間がなくなってしまった。それでも、話し合いを通して「生きていくために最低必要なもの」と「生きていくためにあれば便利なもの」の違いや、修理やメンテナンスの必要性などに気づききっかけになり、国際貢献の視点を強化することにつながったという手応えを感じた。また、教師と生徒の双方向関係だけでなく、生徒と生徒の多元的方向関係を構築することで、教室内の学習者一人一人の存在が意味をもち、多人数の一斉授業の中で、学習者としての人格を尊重し、自尊感情育成の一要因となることも期待できた。

3, カンボジアについて生徒からの質問と回答

カンボジアへの教師海外研修に参加する自分にとって、カンボジアの学習は必然であるが、生徒にとっては、カンボジアを学ぶ必然性は薄い。貿易港を有する「ヨコハマ」は東南アジア諸国とは、経済的に深いつながりがあり、また、神奈川県は「カンボジア県」と呼ぶ人がいるほど、多くのカンボジア人が在住している。しかし、エッセイコンテストの賞に海外旅行がある話題になったとき、「ヨーロッパなら旅行したい」など、東南アジアへの興味・関心が低い発言が多数あった。カンボジアと生徒の環境をつなぎ合わせ、またエッセイコンテストの参加動機を高める工夫として、夏期休業前に、生徒へカンボジア訪問予定箇所を提示し、自由に質問項目をあげさせた。これは、研修参加にあたって何をみて聞いてくるかなど、訪問先での短い時間のインタビューをいきあたりばつたりのものにしないという教師側の事前準備にもなることも期待したのもでもある。

質問をあげさせたときには、自分の質問をカンボジアに在住する人たちが回答することで、カンボジアに興味を持ち、理解を深めさせることが目的であった。しかし、集めた生徒の質問そのものが「ステレオタイプの思いこみ」や、同様の質問を自分がされたら答えに窮するであろうものがあり、これに気づかせることも意義あることと考えた。例をいくつか挙げると、カンボジア事務所に働くJICA職員への「食事とかトイレとか風呂とかどうしているか」、シニアボランティアの金子氏への「合気道を教えて生徒と自分に何が残るか」、理科教育改善プロジェクトの小松氏への「ポルポト時代の教員虐殺をふまえて、カンボジアで教員をやるのは怖くないのか」、カンボジア日本友好学園の生徒への「どんな生徒が多いか」・「学校がなぜあるのか、なぜ学校に行くのか」などが気になったところである。また、質問の多くにカンボジアと日本の比較によるとらえ方が多く、今現在を生きている具体的人物をみないで、抽象的人物によって物事を理解しようとしている点も克服すべき課題と考えている。

授業においては、プリントした質問項目を提示し、これに対する回答と質問の問題点などを指摘したが、実施日は猛暑といってよい残暑で、冷房装置も使えない中で、集中力を引き出すことができない生徒が何人もいた。ただ、「理科教育改善計画プロジェクト」に携わる村山哲也氏と小松真澄氏からは、生徒に質問に対して文書で回答を頂いたのをこれをそのまま提示し、授業後にも読むことを指示できた。両氏共にその回答は、単に質問に答えるだけでなく、その質問に潜む問題点を高校生にも分かりやすく記述していただいているので、それ自体がわかりやすい国際理解教育の教材となった。

4, フォトランゲージ

国際理解教育では、世界を多方向に関連あるシステムとして理解させることは重要なことである。異なる事象を一つのテーマのもとに再構成する思考能力は、国際理解教育だけではなく、歴史教育にも大事な要素である。しかし、デジタル世代の特徴であるのか、少なくとも本校の生徒は苦手であるように見受けられる。今回は、一組三枚の写真を題材に使って、班ごとに与えられテーマについて発表させるフォトランゲージを行った。国際理解を遠い異国のこととしてではなく、足下からの国際理解や身近な暮らしと世界から考える習慣をつけさせることを意図し、本校や日本の風景をできる限り組み込む努力をした。

フォトランゲージという生徒にとって初めての作業に対するとまどいや抵抗を軽減させるために、班の構成は興味のあるテーマへの希望を優先させた。このため、人数は後述するように多い班と少ない班のバラツキはでた。授業計画では、Brain Storming (10分) Photo Language (15分) Presentation (15分) Conclusion (10分) 合計1時間(50分)の授業で完結させるものであった。しかし、実際の授業では、Brain Storming (10分)においても、活発な意見がでず、教師が中に入ってこ入れしなければいけない班があり、Conclusion (10分)を削って延長した。それでも、提示された写真とテーマに関係性を見いだせない班がほとんどで、Presentation (15分)にたどりつけたのは、「豊かさとは、貧しさとは？」の班だけであった。このため予定を変更し、フォトランゲージの時間を他日に1時間とり、「豊かさとは、貧しさとは？」の発表をモデルとして再度挑戦させた。また、終了した班の生徒は、当日欠席者がいた「自立支援とは？」の班に組み入れフォローさせた。それでも、「自然環境保護とは？」の班は、写真とテーマを関連づけられず、また発表でも手間取る結果となった。

(1)「豊かさとは、貧しさとは？」2人、



教師が提示した写真の説明 ()内は、教師側の写真提示意図や補足

「 は、本校の正門の写真です。」(防犯のため門が閉じられている状態を撮影した)

「 は、カンボジアの理科教育改善プロジェクトでのプレイヴェーンにある小松真澄先生の職場です。」(無造作に枯れ木が放置されている先には、入り込んだ一頭の牛が座っている)

「 は、アンコールワットで有名なシュムリアップにあるクメール伝統織物研究所「伝統の森」での女性の労働風景です。」

生徒の発表

「 は、ランドセルが日本と同じもので、私たちのお下がりかもしれない。見た目は貧しそうであるが、必要最低限の環境は整っているように見える。母親とずっと一緒にいられる子供は幸せかもしれない。 は、無造作に枯れ木が放置されているが、牛が出入りできる開放的な環境である。それに対して、 のように、日本では防犯のためとはいえ囲われていて閉鎖的である。このように、これは豊かな環境だとか、貧しい環境だとかを決めつけて語ることはできない。」

(2)「自立支援とは？」3人、



スモークーマウンテンで働く子供 職業訓練のレストラン 本校の学食 250 食堂

教師が提示した写真の説明

「 は、プノンペン近郊のゴミ捨て場、スモークーマウンテンで、ゴミから資源リサイクルをして稼ぐ子供です。」(発展途上国に多くみられるスモークーマウンテンの説明も行った。なお写真は、ネット上の<http://www.geocities.jp/cambodiafreejp/cambodiapage8.html> から引用した)

「 は、スモークーマウンテンなどでゴミ拾いをしている人を選抜して、訓練と働く場を提供しているレストランの厨房です。」(JICAカンボジア事務所の小川氏の説明による。レストラン内には Spanish Agency For International Cooperation and Development がスポンサー、スイスの LAUSANNE がサポーターの記載あり)

「 は、本校の学食です。」(本校の学食である「250 にこまる食堂」は、新聞やテレビでも取り上げられる若者自立就労支援の場でもある。説明のため以下にホームページの抜粋を掲載する。)

にこまる食堂は、「生きづらさや働くことに困難を抱えた若者たち」の就労・ジョブトレーニングの場となっています(若年無業者、ひきこもり、ニート、発達障害、軽度の知的・精神障害を抱える若者など)働いている若者は、K2 インターナショナルグループの合宿型若者自立プログラム「Y-MAC」の利用者やその卒業生です。段階的な就労体験の一環として無償で働く若者やひとつ段階を上がり、契約社員として対価を得て働いている若者がいます。
<http://www.k2-inter.com/nikomaru/about/index.html>

生徒の発表

「 のように、同じ国でも子供がちゃんとしたところで働けない人もいれば、 により、教育や訓練によって、しっかりした仕事や収入がある人もいる。日本の子供のように勉強ができ守られる環境下にいない子供たちが危険な場所で働くなど大変な人たちがいるのに、自分たちは作られたものを で食べるだけでよくない。」

*250 食堂には新聞の切り抜きなど自立就労支援の説明があるが、生徒は読んでおらず、このことに関して認識がなかった。今回の授業で初めて250 食堂について知ったようである。

(3)「必要な援助とは？」4人



電気の無い学校にある援助物資 同校にあるオブジェ 公衆トイレ

教師が提示した写真の説明

「は、牛のいた校庭の教室内で、段ボールは海外からの援助物資です。なお、牛が自由に出入りする学校は、泥棒の出入りも容易です。電線が盗まれ、この教室には電気が通っていません。」

「は、同校にあるカンボジアでは有名なお坊さんの像です。」

「は、私が使用したコンビニに付属した男子トイレの様です。」(同校のあるプレイヴェーンのコンビニに入った際に使用したトイレで、店外にあり公衆トイレのように使用した。)

生徒の発表

「は、電気がないのに、電子ピアノを送っても無駄である。電子ピアノが本来の使われ方ではなく、物置台となってしまう。送る前に現地のことを調べるのが、普通だと思っていたがそうでないのにびっくりした。の像は、宗教的なプライドを捨てて、像をつくるお金は違うところに回すべきだ。は、壁とかは綺麗だし、トイレの形はちゃんとしているのに、詰まっていたり、壊れていたりする。の像をつくるくらいならトイレを修理したり掃除をしたり、電気を通すなどに使うべきではないでしょうか？」

*生徒は、トイレを学校の設備と誤解してストーリーを作っている。しかし、生徒が写真からよみとり作り上げたストーリーは価値が高いものである。少なくとも、カンボジア全体としてみれば、このような矛盾は多く見受けられるものである。

(4)「自然環境保護とは？」5人



アンコールワット

タ・プローム 木に浸食される遺跡

日本の棚田

教師が提示した写真の説明

「は、世界遺産にもなっているアンコールワットです。」

「は、アンコールワットの近くにあるタ・プロームという遺跡です。」(タ・プロームは、自然の力を明らかにするために、樹木の除去や本格的な積み直しなど修復の手を下さない。)

「は、日本の棚田です。」(インターネットフリー素材より引用)

生徒の発表

「は、世界遺産で大切にしなければいけない。は、自然環境保護とは木を守り大切にすることだし、遺跡を大事なのでこのままにしておく。の棚田は、人工のもので、自然環境保護とは関係ありません。」

「は、このままにしておけば遺跡が壊れていくので、遺跡を保存するか、木を保存するかを選択しなければいけないかもしれない。(他の生徒の発言)」

教師の質問

「棚田は人工物だから、自然環境保護のために破棄すべきでしょうか？」

生徒の回答

「棚田も大事だから、そのままにしておけばよい。」

教師の補足

「棚田を維持するために、人手をかけなければ棚田は崩壊してしまう。棚田によって成立している生態系も失われ、メダカなども絶滅の危機にあります。また、日本の里山は、放置して成立したのではなく、長い年月をかけて人間の管理のもとで保全されてきたものです。自然環境保護というときに、何が自然なのかもこれを機に考えてみてください。」

*このテーマが一番簡単にストーリーをつくれると予想していたが、実際には一番作業が困難になった。それでも、発表しながら、また発表後の補足によって気づきがあったものである。

5, 異なる立場についての理解

この講座の授業最終日は、対立する見解に対して双方への主張を理解しつつ、自己の見識を表明していく場とした。双方対立する意見を利用した授業として「教育・競技ディベート」がよく利用される。しかし、十分な準備なしにディベートを行った場合、詭弁的技術の習得や他者を批判するだけに陥る危険性があり、また意見の対立が人格の対立に転化されることも懸念される。このため、ディベートそのものは行わずに、意見を述べたり教師側の質問に答えさせたりすることにとどめた。

題材としては、ニューヨーク 2001 年同時多発テロ被害跡地近くへのモスク建設の是非を利用した。授業の最初に題材の新聞の切り抜き（朝日新聞 7/23,9/10,9/12）を生徒に輪読させてから、建設の是非について意見を述べさせた。表明された生徒の意見は全て建設反対であり、建設賛成はいなかった。このため教師側が建設側の視点を生徒に提示として、ニューヨークにも多数のイスラム教徒がいることや、他宗教と共存している様子などを提示した。



なお本題材はニューヨークのことであるが、日本でも今後考えていかなければいけない視点である。10 万前後のムスリムが日本で暮らし横浜を含めて各地にモスクが建設されているが、墓地用地の課題が未解決である。火葬が主流である日本では、ムスリムが求める土葬墓地が不足している。現在の日本では、山梨県甲州市と北海道余市町の 2 か所だけで、新墓地建設に対して反対運動が起きている。ニューヨークのモスク建設は極端ではあるが、同様のことが今後日本でもおきていく可能性は高く、これに対する見識を持っていくことも大事である。

成果と課題

1, 生徒のコメント

教師も生徒も慣れていない初めての試みでの授業であったが、生徒が一連の授業に対してどのような感想を持ったか自由に答えてもらった。この感想を授業ごとに再分類して以下に記載する。

無人島ゲームについて

「無人島ゲームは楽しかったけれど、趣旨が伝わらなかった。」

「授業の中で行ったことは普段は注目してよく考えることのないような点ばかりで少し難しかったけれど、気づかされる部分もあって良かった。特に無人島ゲームをやった時に、物にあふれた生活をしている私たちにとって便利だと思える物でも、支援される側の人々にとっては、ありがたいものなのかが印象に残っている。」

フォトランゲージについて

「日本とカンボジアを比べているのが印象的だった。電車からの景色とか、いつも歩いている所とかを普段と違う視点で見ると可笑しかったり気持ち悪かったりする。写真にして前に出されると、いつもと違う視点で見ることができて面白かった。」

「豊かな日本という前提でカンボジアを貧しい国として見るのはちょっと変だと思う。何かを得れば何かを失うのは当然で、どっちの国にも良いとこと良くない所がある。」

「テーマによって分かりやすいものも少し考えづらいものもあったけど、写真をよく見て考えるのは勉強になった。」

「やり方がよく理解できず、「自然環境保護とは？」のように関係性を見いだせないものがあった。」
「よく募金活動するのを見るが、そのお金は本当に役に立っているかと疑問に思うことがある。しかし、実際に発展途上国の為に使われるといっても、役に立っているか疑わしいということがこの発表を通して一番感じられた。せっかくの善意が無駄になっているかもしれないということを皆知ったら、改善されるかもしれないが、もしも、もう何もしないということになったらどうなってしまおうと思った。」

「援助する前に、その国やその地域の現状はあまりよく調べられていないことがある。」

「カンボジアと日本の生活・暮らしを比べてみて一番考えさせられたのは、豊かさについてだった。基準は人それぞれだが、カンボジアの人々は日本に住む人が持っていない豊かさをたくさん持っているように感じた。」

異なる立場についての理解

「最後の授業でモスク建設について、授業の時は被害者の気持ちも考えないで無神経だと述べたけど、加害者の親族でも加害者でもないので建設は自由だと授業後に思った。ただ、場所については少し考慮してほしい。話し合いの機会を政府がつくってあげたらどうかと思う。全てが悪いというわけでもないで、双方の意見を聞くべきだと私は思う。」

「新聞を読ませて考えさせる点が良い。今時真面目に考える人は少数。」

「普段新聞を読んでいないので読んでよかった。知らない言葉とかあって読まなければいけないと思った。」

その他

「社会科は、小学校は暗記する物で受け身、中学校はその勉強したものを受験に活かす手段であったが、高校は頭に入った知識や覚えたことをリンクさせていくことが大事である。」

2, まとめ

生徒のコメントは、フォトランゲージと無人島ゲームに集中し、その他についての言及は著しく少ない。これは、フォトランゲージなどを初めて体験した新鮮さによるところが大きいと思う。しかし、エッセイ作成など、アウトプットの重要性を生徒に認識させることができている可能性も今後は考えていかなければならない。生徒は、与えられた用語を要領よく暗記することが、地歴公民(社会)科の学習であるという意識は強い。この意識は、今回の取り組みで多少の修正はできた。ただ、夏期休業後は公務員採用試験を直前にひかえ、気がせいしている生徒がいることなどを今後は配慮していく必要がある。

途上国を題材にした国際理解教育では、対象国の悲惨さなどが切り口になりやすい。JICA研修旅行も、ネガティブではないポジティブなカンボジア像を生徒に掴ませる教材収集は大きな目的であった。通常授業の中で時事問題理解として新聞記事を使用した。今年カンボジアに関してはポルポト派のツールズレン元所長の特別法廷が取り上げられこれを紹介した。これが結果的には、「ポルポト時代の教員虐殺をふまえて、カンボジアで教員をやるのは怖くないのか」などの生徒のカンボジアへの偏向した質問を誘導したと思われる。今回は、フォトランゲージによって、「カンボジアの人々は日本に住む人が持っていない豊かさをたくさん持っているように感じた。」のように修正ができた。ニュースは対象の素晴らしさではなく、問題点を取り上げる物なので、時事問題をどのように扱っていくかは今後の課題である。

国際理解教育は、人権の観点から社会の問題をとらえ地球環境を理解し、足下から世界をみつめていくものである。今回の実践では、カンボジアを題材として6時間の授業を使って 気づきの重要性を意識して取り組んだ。しかし、限られた授業数の中で時間を確保していくために授業の組み立てに工夫が必要となる。また、授業の効果をより高めるために3年間にわたって継続的な教育の検討も必要である。これを解決していくためには、科目担当者だけでなく、教科全体として、さらに学校全体としての協力体制をとっていくことも必要と思われる。

カンボジアについての生徒からの質問

1、JICAカンボジア事務所の人へ

なぜJICAに入ったか？4人
働いてよかったと思いますか？この仕事のやりがいは？ 3人
カンボジアについて一番驚いたことは？
主にどんな活動をしているか？
7人
一番苦労することは？
現地の人と接しているか？
日本が恋しくならないか？2人
今のカンボジアの状況 良くなっている点・悪くなっている点 2人
カンボジアの治安状況2人
日本との違い
食事とかトイレとか風呂とかどうしているのか？

1、金子信一氏(合気道を教えるシニアボランティア)へ

生活費をどうしているか？
2人
なぜ合気道で国際的なボランティアをしようとしたのか？ 12人
やりがいを感じる時は？4人
どのような人が習いに来ているか？
合気道を教えて生徒と自分に何が残るか、得られるか？ 3人
日本が恋しくならないか？
どうやって教えるのか？(言語)
現地で合気道は必要とされているか？現地は合気道をどう思っているか？ 3人
合気道を通じてどのような交流ができたか
どんな発見があったか？ 3人

2、村山哲也氏(プノンペン理科教育改善計画プロジェクト)へ

教育改善とはどんなものか？ 2人
どのような子供が多いか？
生活費をどうしているか？
カンボジアの教育現状・水準4人
どのような方向に教育を改善したいのか？
2人
昔と今とでどのように変化しているか？教

育は発達してきているか？3人
子供たちが全員教育を受けられるか？どのような家庭か？ 4人
学べる環境か？
日本が恋しくならないか？
何か問題・障害か、大変か？ 2人
教員を育てるのはどれくらい難しいことなのか？
教育改善することで、今後カンボジアにどのような発展が起きるか？
日本とカンボジアの子供に対する考え方の相違点
日本よりカンボジアの方が優れている点
カンボジアで教員になる人はどれくらいいるか？
カンボジアの子供の要望は取り入れているか？
学習能力の日本とカンボジアとの比較

3、小松真澄氏(プレイヴェーン理科教育改善計画プロジェクト)へ

ポルポト時代の教員虐殺をふまえて、カンボジアで教員をやるのは怖くないか？
教員になりたい人はどれくらいいるか？どんな人か？何人ぐらいがなれるのか 6人
やりがいを感じる時は？
言語が通じなくても学べることは？
最低限の文字はかけるか？
大変なこと、問題点は？ 2人
活動の内容は？
これだけは必ず伝えることはあるか？養成するときポイントは？2人
今一番欲しいもの、やりたいもの、日本の教員養成校と違うところ5人

5、カンボジア日本友好学園の生徒へ

勉強時間は？ 2人
卒業後の進路は？ 将来の夢 そのために何をしているか？ 8人
日本のイメージは？日本のことを知っているか・どんなこと？ 4人
日本やアメリカなど先進国のイメージは、憧れるか？ 2人
学校生活は楽しいか？
勉強は楽しいか？ どんな工夫をして勉強

しているか 4人
学校と生活の両立は？
なぜこの学校を選んだのか？
学校のカリキュラム
給食はあるか？
学校ではやっていること 5人
放課後や休日何をしているか？ 3人
好きな食べ物は？ 3人
今一番したいこと、欲しいもの、2人
どんな生活をしているか？ 2人
楽しいこと、嬉しいこと、悲しいこと、つらいこと、どんな悩みがあるか 10人
授業の受け方、勉強していて楽しいか？ 2人
好きな授業は？ 3人
どんな生徒が多いか、
今のカンボジアをどう思うか？好きか？ 3人

21 世界に伝えたいこと

22 学校がなぜあるのか？学校に行くのか？

6、カンボジア日本友好学園の教師へ

カンボジアの治安などからみて、世界に足りないもの、なければならぬものは何だと思うか？

大変なことは？ 3人

日本に求めるもの

教育の中で何が一番難しいか？

生徒たちにどうなって欲しいか？将来どうなって欲しいか？ 2人

生徒の人数、教員数は足りているか？ 2人

珍しい授業はあるか？

月給は？

生徒の様子、日本の生徒と違うところ 熱

心に生徒は授業を受けているか？ 3人

やりがい？

学校ではどんな勉強をしているか？ 3人

生徒の夢の実現のためにどんな努力をしているか？

日本とカンボジアの教育の違い

いるか、復興の目的は 3人

伝統復興の状況 2人

どんな織物があるのか

織物が機械化されたらどうするか

海外からの物資や資金の援助はあるのか

人々にどんな影響をもたらせたか

活動の難しいことは何か・苦労、活動の内容 3人

伝統織物の良さ・魅力を教えてください。

作り方・特徴 4人

8、日本地雷処理を支援する会

支援しようとしたきっかけは？目的 6人

戦争で地雷を使用したことをどう思うか？

地雷が怖くないのか？危険なのになぜが**ん**ばれるか？ 12人

一番怖い瞬間はいつなのか

この仕事をどう感じているか

爆発に巻き込まれないか？処理中に被害にあった人はいるか？ 3人

被害にあったときの責任は誰が負うのか？

命の保障は 2人

怪我をしたときの感染症などの危険性は？

撤去した地雷数、未撤去地雷の予測数、地雷を将来すべて処理することは可能なのかすべてを処理するのにどの暗い時間がかかるのか 6人

地雷を一つ処理するのに1億かかるといわれたが本当か？

高校生ぐらいの人も処理を支援しているか

初めて地雷処理した時の感想

今までの活動での問題やエピソードは

7、森本喜久男氏(クメール伝統織物研究所「伝統の森」)へ

宣伝はどうしているか

伝統復興や保全についてどのように思っ

以上